

## 略歴 (溝口勝)

- 1960 栃木県生まれ(農家の次男)
  - 1982 東京大学農学部農業工学科卒業
  - 1984 東京大学大学院博士課程中退
  - 1984 三重大学農学部農業土木学科助手(農業物理学)
  - 1990 米国パデュー大学客員助教授(Agronomy Dept.)
  - 1995 三重大学生物資源学部助教授(農業物理学)
  - 1999 東京大学助教授 大学院農学生命科学研究科  
(環境地水学)
  - 2003 内閣府技官(参事官補佐)併任
  - 2005 東京大学准教授 大学院農学生命科学研究科  
(国際情報農学)
  - 2008 東京大学教授 大学院情報学環
  - 2010 東京大学教授 大学院農学生命科学研究科  
(国際情報農学)
- 現在に至る

### 連絡先:

TEL 03-5841-1606

東京大学 大学院農学生命科学研究科

農学国際専攻・国際情報農学研究室

〒113-8657 東京都文京区弥生1-1-1 農学部2号館別館462号室

(地図) <http://www.iai.ga.a.u-tokyo.ac.jp/map.pdf>

Email: [amizo@mail.ecc.u-tokyo.ac.jp](mailto:amizo@mail.ecc.u-tokyo.ac.jp),

Skype: masaru.mizoguchi Twitter&Ustream: msrmz

<http://www.iai.ga.a.u-tokyo.ac.jp/mizo/>



東京大学農学国際専攻 国際情報農学研究室教授

# 溝口勝

みぞぐち・まさる

1960年、栃木県大田原市の農家に生まれる。82年、東京大学農学部農業工学科卒業後、同大学院農学系研究科に学び、土壌中の物質と熱の移動の実験や解析を手がける。84年、三重大学農学部助手を経て、90年に農学博士(東京大学)の学位授与。2003年には、科学技術政策・環境分野担当の参事官補佐として内閣府の技官を2年間務める。2010年より東京大学大学院農学生命科学研究科教授。3.11以降、福島県飯館村で農地の除染技術の開発に取り組んでいる。

「までい工法」の実験を継続  
現場の実状を知ることが大事  
本誌編集長 溝口さんには本誌  
14年3月号にもご登場いただき、  
農家自身の手でできる自然の浄  
化作用を利用した農地除染法に  
ついてお話をうかがいました。  
まずはその「までい工法」につ  
いてあらためてご説明ください。  
溝口勝・東京大学教授 「まで  
い工法」は、ひと言でいえば汚  
染土をその場に埋設する農地除  
染法です。ゼネコンや大型機械  
に頼らなくても、また大量の  
「廃土」を出さずとも農家自身の  
手で行うことができます。田車  
を使って人力で泥水を掻き出し、  
あらかじめ田んぼの隅に掘った  
穴へ流すと、泥水は浸透と蒸発  
で干上がり、セシウムをしっかりと  
り吸着させた粘土だけが表層に

## 〳復興の農業土木学〳で 飯館村に日本型農業の可能性を見出す

「農家自身の手でできる農地除染」を提唱し、福島県飯館村で実験を繰り返してきた土壌物理学学者、溝口勝教授。現在もなお行政主導の大規模でコストのかかる農地除染作業が進められるなか、除染後の課題を見据えた〳復興の土壌物理学〳を粘り強く訴えかけ、現地の人々とともに新たな日本型農業の可能性を探っている。その取り組みにかける溝口教授の思いと展望について聞いた。



乾いて残ります。その上にきれいな土を厚くかぶせ、放射線を遮蔽します。その埋設処理が終わってからの稲を作付します。先日その水田土壌の深さ別放射線分布を測定したところ、この2年間で放射性セシウムが地下へほとんど移動していないことが確認されました。現在も飯館村の地元農家の方や認定NPO法人「ふくしま再生の会」の協力のもと、現地での方法の改良を繰り返しています。「ままでい工法」は土や水に備わった物理的な浄化作用や遮蔽効果を利用したきわめてシンプルで効果的な除染法といえます。

**編集長** 前回お話をうかがってから1年以上が経ちましたが、その後「ままでい工法」の普及状況はいかがですか。

**溝口** 徐々に認知度が上がっている実感はありますが、除染法としては普及していません。実際の除染工事は、いまだに大型の建設機械で表土を除去する方法がほとんどで、廃土処理の問題も解決していないのが現状です。このような状況になってしまっている理由は実に単純で、この表土削り取り法が国指定の標準的な除染法として定められているからです。予算も決まっているため、いくら「ままでい工法」が効果的で経済的であっても、もはや違う方法に切り替えることはできないのです。飯館村役場の担当者も、ようやく大量の廃土のフレコンバックを地主に頼み込んで地所に仮置きさせてもらえるようになった後で、いまさら「違う方法があります」などとはいえないのが実状のようです。

**編集長** 有用な方法が大々的に採用されないのは歯がゆい感じがですね。

**溝口** この1年間、重要な選択を行う立場にある人間が現場をまったくわかっていないということを痛感しました。除染方法の決定にあたって、最終的な判断を下した役人たちは、いったいどれだけ現場に足を運んだのでしょうか。福島第一原子力発電所をめぐる問題も、結局はそこに集約されると思います。東電役員しかり、国の政策に携わる役人しかり、自分事としての実感がなければ、判断を誤ってしまふのは当然です。

まうのは当然です。

**復興の現場で役立つ実学に長けた若い人材を育てる**

**編集長** おっしゃる通り、除染以外にも復興政策のさまざまな局面で現場魂の欠如が感じられます。何か打つ手はないのでしょうか。

**溝口** 被災地復興は今後も長期的に進めていかなければならぬ問題ですから、今後のためにも現場の実状を理解できる若い人材を育てていくことが大事です。そこで、この1年間、私は東京大学の講義の中で飯館村の現状を紹介し、学生たちの感想を積極的に聞くよう努めてきました。たとえば、土壌除染の農業工学的研究や福島復興に土壌物理がはたす役割などについて講義した後に「あなた自身ができる復興について考えを述べよ」という課題を出すのです。すると「自分は一生農業に携わることもなければ、被災地の村を訪れることもないだろう」という前提の上で感想を述べる文系の学生が多数いました。まずはこのあたりを正していく必要

があると感じましたね。

**編集長** 現場の実状を想像できないどころか、そもそも自分には無関係の事柄だと思っているわけですね。そのような学生が後に役人になり、農地除染に携わることになれば、やはり現在の役人と同じ選択をするかもしれませんね。

**溝口** その通りです。だからこそ、なるべく若い人たちに正しい知識の芽を植え付けることが大事なのです。むしろ、大学に入ってからでは遅すぎるようにも思います。たとえば、私の講義をキッカケに「飯館村に行ってみよう」とメールしてくれた1年生がいました。空間線量や現状についての知識を事前に仕込んだ上で昨年6月に彼を連れて飯館村へ行き、現地実験の手伝いをさせました。彼は実は高校生時代にも何度か被災地を訪問しています。彼の出身校である灘高校のある教師が、毎年「東北合宿」と称して夏休みに生徒たちを被災地に連れて行っていたのだそうです。その経験を通じて被災地の実状を目の当たりにし、私の講義や私と「ふくしま再生の会」との活動などに興味を持ったというわけです。彼がその後友人に声をかけて、9月に14人の1年生が飯館村へ行く東大現地見学会の企画が実現しました。こういった取り組みが自然に広がっていくことが肝心なのです。

**編集長** 中学・高校時代に、ボランティア経験や地域貢献活動などに携わる機会があつたかどうかは重要ですね。

**溝口** はい。ただ、実際にはさらに前の段階からの教育も必要だと思います。小学生のうちから生命科学や災害、ボランティア活動の意義などを教えていく必要があります。14年8月には夏休みを利用して教育系NPOの大学生の案内で飯館村の小学生26名が東大に遊びにきたのですが、私は「小学生のための土壌科学 飯館村の土」と題して実験付きの特別講義を行いました。理科の授業の教材として使用できるように資料を作成したので、ぜひさまざまな場面で活用してほしいと思います。

**編集長** 小学生に向けて、どのような講義をされたのですか。



本誌編集長



# 固定観念にとらわれることなく さまざまな視点から物事を捉える訓練をしてほしい

溝口 私の研究室の公式サイ  
ト「みぞらぼ」(<http://www.tai.gai.a-u-tokyo.ac.jp/mizo/mizolah.html>)に資料をアップ  
しているので、詳しくはそちら  
を参照していただきたいのです  
が、「大学とは何か?」「土とは  
何か?」というところから話を  
はじめました。小学生のうちに、  
固定観念にとらわれることなく  
さまざまな視点から物事を捉え  
る訓練をしてほしいからです。

タルに物事を捉える必要がある  
のです。

## 除染後の飯館村の可能性 スマート農業の先端基地へ

編集長 溝口さんが飯館村で取  
り組んでいる最新の活動につい  
てもご紹介ください。

溝口 「ふくしま再生の会」の  
集会では、もっぱら除染後の課  
題について論じ合っています。  
除染が無事済んだとしても、そ  
こをもとの肥沃な土地に戻すま  
では、当然何年もかかるでし  
ょう。帰村しても作物がにつく  
れない、仮につくれたとしてもそ  
れが売れる保証がないと、村  
民としては避難先で今の生活を  
続けたほうがよいのではないか、  
と半信半疑になってしまいました。  
ですから、その肥沃度を失った  
土地でどうやって農業を展開し  
ていけばよいのかという具体策  
を考えなければならぬのです。

編集長 まさに机上の空論では  
想像できない、現場の厳しい現  
実ですね。

溝口 はい。土地改良によって  
肥沃度が失われる事例は、これ  
までもあったわけで、日本の農  
業土木学には土地改良後の農地  
を回復させる技術も用意されて  
います。あとはヤル気と根気が  
あるかどうかです。すべては農  
業の担い手に委ねられているの  
です。

編集長 すると、飯館村のこれ  
からのビジョンは福島の復興だ  
けに留まらず、中山間地農業や  
PPP対策など、日本の農業全  
体が抱える問題と密接にかかわ  
ってきますね。

溝口 その通りです。飯館で農  
業をはじめるとは、ヤル気の

まっすぐにいます。しかし、本来、  
農学というのはあらゆる分野が  
複雑で密接にかかわりあってお  
り、遺伝子操作された野菜がど  
のような気候状況や土壌のもと  
で育つのか、どの地域でどのく  
らいの期間でどの程度の食糧不  
足が解消されるのかなど、ト

飯館村の小宮地区で大豆やそば  
の環境とはいえないようです。

ある人にとっては大変おもしろ  
いと思います。これまで新規就  
農や新しい農法を実践する障害  
になっていたのは、多くの場合、  
土地に伝わる慣習や人間関係の  
しがらみでしたが、原発事故で  
すべてがリセットされてしまっ  
た飯館にはそうした障害があり  
ません。考えようによっては、  
新しい日本型農業にチャレンジ  
できるチャンスという見方もで  
きるわけです。

編集長 飯館で生まれる新しい  
日本型農業とは、たとえばどの  
ようなものなのでしょうか。  
溝口 スマート農業<sup>①</sup>がひと  
つのキーワードになるでしょう。  
日本ではオーストラリアなどの  
ように大規模な土地利用型農業  
を推し進めることは難しいので、  
今後はロボット技術やICTを  
活用した超省力・高品質生産を

可能にするスマート農業に活路  
を見出していくことが考えられ  
ます。スマート農業に関しては、  
すでに異業種大手のトヨタや東  
芝などの農業参入も話題になっ  
ています。除染後の土地で新し  
い取り組みをはじめやすい飯館  
村は、まさにこの格好のモデル  
地区になり得るのではないでし  
ょうか。ほかにも水不足のイス  
ラエルで発達した点滴かんがい  
技術などを応用し、ハウス内で  
汚染土を使わずに避難先から遠  
隔栽培管理するなど、技術力に  
優れた日本のポテンシャルをも  
つてすればさまざまな可能性が  
拓けるはずですよ。

編集長 除染後の農地利用から  
スマート農業の先端基地の構想  
まで、まさに現場に根を張った  
「活動に感服しました。」



〔編集長口評〕農業農村工学の創始者といわれる上野英三郎博士  
(東京・渋谷のハチ公の飼い主)は「農業土木の仕事は食糧生産の基  
盤整備である」と定義したそうだが、この「基盤整備」にはさまざま  
事柄が含まれている。現在の飯館村に当てはめてみれば、農地除染  
や土地利用、きれいな農業用水の確保、ため池の管理、肥沃度の回復、  
農村計画、地域創生と産業再生など、すべての課題がこの言葉に集  
約され、それぞれが密接にかかわりあっているのだ。溝口さんはこ  
れを一括して「復興の農業土木学」と称し、現場に即した活動を続け  
ている。そして彼の主眼は復興だけでなく、日本農業の新たな地平  
を拓いていくことにある。スマート農業を核とした飯館村での今後  
の取り組みに期待したい。

# 土壌物理学者が仕掛ける農業復興 農民による農民のための農地除染

除染にどうしてそんなに時間と金がかかるのか。放射性物質の特性を知って除染すべきではないか。震災から3年が経とうとしている今も遅々として進まない福島県各地の除染、山積みなされた「廃土」の仮置き場の問題、どれもこれも解決の目途がまったく立たない状況だ。そんななか、飯館村で「ゼネコンに頼らない農地除染」「農家自身の手でできる農地除染」を提唱し、現地の人々と組んで実験を繰り返す土壌物理学者がいる。東京大学の溝口勝氏だ。除染を皮切りとして地域の農業復興を目指す溝口勝氏に、除染の現状と今後の展望について聞いた。

## 自然の浄化作用を利用して 農家自身の手で農地の除染を

編集長 まずは福島県飯館村での最近の活動や除染の現状についてお聞かせください。

溝口勝・東京大学教授 菅野宗夫さん（63歳）を中心にした地元農家の方々やNPO法人「ふくしま再生の会」の協働のもと、昨年10月に「農家自身でできる農地除染法の開発」として、これまでのプロジェクトをまとめました。「農家自身で」というところを強調したのは、ゼネコンや大型機械に頼らなくても、また大量の「廃土」を出さずとも、除染は自分たちの手でできる、ということを広く知らしめたかったからです。

震災の3カ月後の調査でわかったことですが、放射性セシウムには土壌中の粘土粒子と強く結びついて表層に留



# 溝口勝

東京大学農学国際専攻  
国際情報農学研究室教授

溝口勝（みぞぐち・まさる）

1960年栃木県大田原市の農家に生まれる。82年東京大学農学部農業工学科卒業後、同大学院農学系研究科に学び、土壌中の物質と熱の移動の実験や解析を手掛ける。84年三重大学農学部助手を経て、90年に農学博士（東京大学）の学位授与。2003年には総合科学技術会議・環境エネルギー担当分野の参事官補佐として内閣府の技官を2年間併任。10年より東京大学大学院農学生命科学研究科教授。3.11以降、福島県飯館村で農地の除染技術の開発に取り組んでいる

まり、深いところまではしみこまないという性質があります。そのため、有効な除染を行うにはセシウムを粘土ごとと除去するのが一番です。その標準的な方法として農林水産省が定めているのが、大型機械によって表土を除去する「表土削り取り」、水田における「水による土壌攪拌・除去」、地表層付近の土壌と下層にある土壌を重機で反転させる「反転耕」の3つです。それぞれ土1キログラムあたり1万ベクレル以上の場合、5000ベクレル以上の場合、それ以下の場合、と基準が設けられています。これに従って除染を行えばもちろんそれなりに効果はあるのですが、実態としてはほとんどの場合、表土削り取りが実施されているのです。「とにかく全部きれいにしてほしい」という被災者の心情を汲んで、反転耕でも十分に除染可能な地域であったりも、やたらと予算をかけて大規模な除染作業が行われているのです。しかも、削り取った土は汚染された「廃土」として地区ごとの「仮仮」置場に山積みにされています。このような状況から脱するためにも除染に関する正しい知識を広め、農家自身の手でできる現実的な除染法を考案する必要があるのです。

**編集長** 具体的に、どのような除染法なのでしょか。

**溝口** NPO法人「ふくしま再生の会」の方たちとともに開発したのが、農水省の3つの標準除染法を細かく丁寧いに組み合わせる「まてい工法」です。「まてい」(丁寧い)という地元の方言を冠した独特の工法です。さっそく、田車を使って人力で泥水を掻き出し、あらかじめ田んぼの隅に掘ってあった穴へ流す、という方法を試してみました。泥水は浸透と蒸発で干上がり、セシウムをシツカリと吸い取った粘土だけが表層に乾いて残ります。その上にきれいな土を厚くかぶせ、放射線を遮蔽しながら埋没処理するわけです。3カ月後にその土を分析してみると、セシウムはやはりほとんどそのままの状態、土の中には浸みこんでいませんでした。これは、私たちのような土壌の専門家に見れば、常識的な浸透濾過現象の結果であり、水の物理的な浄化法のひとつでもあるのですが、下流の住民の方からは「地下水が汚染されるからやめてくれ」という抗議もNPO法人の事務局にありました。そこで「You Tube」でペットボトルを使った泥水の濾過実験の動画を公開するなどして、この除染法の安全性について説明しましたが、適切な除染法を多くの方に理解してもらうには、こういった努力も必要なのだとことを実感しました。

**編集長** 水による放射線の遮蔽効果も大きいそうですね。

**溝口** その通りです。飯館村の田んぼは今ほとんど野放し状態ですが、水を張っておくだけでも地表面からの放射線を抑えることができ、雑草も生えにくくなります。また、雨や台風によって、セシウムを含んだ泥水は山林から低地や谷間へと流れていきますが、最終的には飯館村のあちこちにあるため池やダム湖に流れ着きます。この「自然現象」を浄化の過程と捉えることもできるわけです。セシウムを固定した粘土を湖底に沈んだままにしておけば、水が放射線を遮蔽してくれます。あとはそれを私たちがどう管理するかということだけです。

自然というのはおもしろいもので、もともと浄化や濾過といった機能を備えているのです。それを上手に利用することができれば、大規模な作業などしなくても十分な除染が可能です。水や土そのものが放射線の遮蔽体になるのだから、それを沈めたり埋めたりしておけばいいのです。セシウムが吸着した粘土を埋めて、たった50センチのきれいな土をかぶせただけで、線量は100分の1から1000分の1になることが理論的にも実験的にもわかっています。下請け業者が指示通りに大規模な除染を実施した結果、山積みに残

された「廃土」を呆然と眺めながら「仮置き場はどうする」といった議論をするよりも、個々の農家が自分の農地に穴を掘って泥を埋めた方がよほど有益です。そして「農家自身でできる農地除染法」を実施した農家に、県や国が除染費用を渡す、というくらいの制度はあってもいいと思います。

### 基準では計れない農家の思い 土は「廃棄物」ではない

**編集長** 農家自身による除染を実現するためには、肝心の農家の方たちの現場への復帰が何よりも必要です。現在、飯館村ほどの程度、帰還可能な状況なのでしょか。

**溝口** 現状、飯館村は3つに区域に分けられていて、最南部の長泥地区は「帰還困難区域」、北の方の佐須や大倉などが比較的線量の低い「避難指示解除準備区域」、それ以外が「居住制限区域」ということになっています。しかし、このように区分けされていても、事実として、どこまで安全なのかなどということには誰にもわかりません。線量が極端に高ければ危険だといえるけれど、IAEAの基準値だって確実なものとはいえないわけですから。そもそも非常に曖昧なところを、観察・実験・考察を繰り返しながら慎重に定めていくのが科学というものです。そういう

意味では、一科学者として低線量被曝なら問題ないとい切ることにはできません。

ですから、ここから先は科学者ではなくひとりの人間としての意見になりますが、たとえば高齢の避難者の方が、狭い仮設住宅で精神的に追い込まれながら暮らすのと、たとえリスクがあるとしても、馴染みのあるところに戻ってユツタリとすごすのと、どちらがよいでしょうか。国は責任を回避するための事前処置として、基準を設けているだけです。実際に強制避難させられている方たちの思いは、そのような基準で線引きできるものではありません。

**編集長** 価値感の問題ですね。生まれ育った土地への愛着も大きいことでしょうか。

**溝口** 農民にとって農地とは、何十年にもわたって耕しつづけてきた大事な「土」です。行政の除染に対する姿勢のなかで、当事者の農家の方たちもつとも怒りを感じるのには、おそらくこの土の扱い方なのではないでしょうか。除染の全体を統括しているのは環境省ですが、彼らにとって汚染された土とはすなわち「廃棄物」なのです。ですが、私たちの除染実験にご協力いただいている農家の方は、大事な土を他のどこへも持って行ってほしくない



編集長口野

農家自身で除染を進めるとも進めてほしい手法である。

といっています。菅野宗夫さん(前出)はもちろんのこと、小宮地区の大久保金一さん(73歳)もそのひとりです。彼は試験田での除染実験を手伝いに来た若い学生たちと交流を持ったことを契機に、生き甲斐を感じるようになったのだそうです。自分が生まれ育ち、代々丁寧に耕してきた土地のことを、若い人たちに覚えていてほしい。

そんな思いから、若いときから得意だった花の栽培にも力を入れるようになり、自宅周りを誰がいつ訪れても美しい花が咲いているような公園にしたいと、計画を立てているのです。

除染をめぐる議論はたんに技術的な問題に終始してしまいがちですが、このような生き甲斐の創出、農家の方たちの土への思いなどを大事にしなければならぬと思います。

## 土壌物理学者の挑戦 「飯館ブランド」を世界へ

**編集長** 溝口さんの活動の成果や除染の正しい知識について知るとは、帰還を望む人たちの決断の助けになるだけでなく、福島イメージを変えていくことにもつながると思います。そのため情報発信はどのように行われていきますか。

**溝口** 国内外の学会などで成果を発表・報告するとともに、すべての実験

や調査の結果をインターネットで公開しています。私の研究室の公式ページ「みぞらぼ」(<http://www.iaj.gakuo-tokyo.ac.jp/mizo/mizolab.html>)では、

震災復興関係の項目として、本日お話しした農地除染法の詳細や飯館村の現場写真集、毎日の各地の線量モニタリングデータも公開していて、誰でも参照できるようにしています。各所の数値を追っていけば、放射線の移動状況も把握できるようになっています。また、福島県の土壌に関するマスコミの報道もまとめてあります。

**編集長** ものすごい情報量ですね。飯館村での除染以外の活動についても聞かせてください。

**溝口** 農業復興に向けて、飯館の特産品開発も考えています。住民の方たちが帰還したときのために、生活を支える産業がなければなりませんから。たとえば、イネの作付実験を実施した結果、放射線量の高い地区でも、白米は10ベクレル以下という数値が出ています。精米の段階で表面のセシウムがほとんど剥がれ落ちるからです。「削れば削るほど濃度が低くなるのであれば、大吟醸が造れるではないか」という発想で特産品の開発をすすめています。大吟醸のほか、セシウムを吸わない性質のあるイモを使って芋焼酎も造るといったのもいいかもしれません。さ

らに濁酒も造って「飯館三酒」と銘打って売り出してはどうかといった構想もあります。また、山菜などもそれぞれ特性を調べて安全なものを選び、飯館特産の肴をつくることだってできるかもしれません。せっかく有名になったのだからただでは起き上らないぞ、という意気込みで、「フクシマ」から

「飯館ブランド」を売り込むのです。GLOBAL G.A.P.(※)などの認証を取り、トレーサビリティ・システムもシッカリと導入すれば、海外展開も可能だと思っています。

**編集長** それにしても、土壌物理学という立場からそこまで地域おこしにかかわるのは稀だと思います。その情熱の源泉とは何でしょうか。

**溝口** 飯館が抱える問題は人ごとではないと思うのです。想定外の惨事は、世界各国どの地域でも起こり得ます。それを自分とは無関係な遠方の出来事として無視しては、いつか何かが起こったときに、また同じことを繰り返してしまおうでしょう。飯館の状況を身近に共有し、これからも少しでも復興に寄与していきたいと思っています。除染はあくまでもそのツールのひとつです。

**編集長** 除染を切口に、福島復興にまつわるお話をうかがうことができました。ありがとうございました。

※ GLOBAL G.A.P. …農産物生産における安全管理を向上させることにより、円滑な農産物取引環境の構築をはかるとともに、農産物事故の低減をもたらすことを目的とした認証制度。欧州の大手スーパーなどの大手小売が独自に策定していた食品安全規格を標準化するために設けたのがはじまり。





# 溝口研究室

# Mizo lab.

 [Top](#)

 [About](#)

 [Research](#)

 [Member](#)  
 [Links](#)

 [Photo](#)

 [Blog](#)



## ★Topics★

- (2015.6.1) [国際土壌年特別企画：なぜ土壌物理の世界に足を踏み入れたのか？](#) (近日公開予定)
- (2015.5.1) [復興の農業土木学で飯舘村に日本型農業の可能性を見出す](#)
- (2015.4.1) [\[生きる。ともに\]「土壌除染の農業工学的研究」](#)
- (2015.3.3) The Rebirth of Fukushima ([D](#), [H](#), [S](#))

<p><b>方針</b></p> <p>1に体力、 2に食欲 3・4がなくて 5にジョーク</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>• <a href="#">教育方針</a></li> <li>• <a href="#">研究方針</a></li> </ul> <p><b>案内</b></p> <ul style="list-style-type: none"> <li>• <a href="#">イメージ</a> <a href="#">ポスター</a></li> <li>• <a href="#">大学院入試情報</a> (<a href="#">求人</a>, <a href="#">研究室紹介</a>)</li> <li>• <a href="#">講義</a> <a href="#">主な研究発表</a></li> </ul>	<p><b>研究プロジェクト</b></p> <ul style="list-style-type: none"> <li>• <a href="#">GRENE</a></li> <li>• <a href="#">SRI</a></li> <li>• <a href="#">Dr.ドロえもん</a></li> </ul> <p><b>震災復興</b></p> <ul style="list-style-type: none"> <li>• <a href="#">震災復興</a></li> <li>• <a href="#">福島土壌除染技術</a></li> <li>• <a href="#">飯舘村モニタリング</a></li> <li>• <a href="#">飯舘村現場写真集</a></li> <li>• <a href="#">マスコミ報道</a></li> </ul>	<p><b>フィールドモニタリング</b></p> <ul style="list-style-type: none"> <li>• <a href="#">農地モニタリングシステム</a></li> <li>• <a href="#">世界の農地から</a></li> <li>• <a href="#">モニタリングサイト</a></li> <li>• <a href="#">現場写真集</a></li> </ul> <p><b>データベース</b></p> <ul style="list-style-type: none"> <li>• <a href="#">農業農村工学講演要旨</a></li> <li>• <a href="#">土壌の物理性</a></li> <li>• <a href="#">農業農村工学i-Library</a></li> <li>• <a href="#">地温データベース</a></li> </ul>	<p><b>近頃の学会</b></p> <ul style="list-style-type: none"> <li>• <a href="#">土壌物理学会</a></li> <li>• <a href="#">農業農村工学会</a></li> <li>• <a href="#">J-SRI研究会</a></li> <li>• <a href="#">PAWEES</a></li> <li>• <a href="#">SSSA</a></li> </ul> <p><b>その他</b></p> <ul style="list-style-type: none"> <li>• <a href="#">セミナー／勉強会</a></li> <li>• <a href="#">雑文</a></li> <li>• <a href="#">報告書</a></li> </ul>
---	--	--	---